

ワンポイント・ブックレビュー

ポリリー・トインビー（著） 棕田直子（訳）

『ハードワーク - 低賃金で働くということ - 』東洋経済新報社（2005年）

“714円”、この金額は東京都の地域別最低賃金を示すものである。1日8時間、週に5日働いたとして得られる収入は週あたりにして28,560円でしかなく、1ヵ月が4週と仮定すれば月収は12万円に満たない。この収入で、東京で1ヶ月間生活することができるだろうか。現実的には限りなく厳しいと言わざるを得ない。

本書は、イギリスの『ガーディアン』紙に勤務するジャーナリストの著者が、ロンドンにおいてこのような生活（1ヶ月間、最低賃金の職業に従事して生活すること）を実践し、その体験をまとめたものである。

時給4.1ポンド（820円）の生活、そのスタートは公営の安アパートに移り住むところから始まっている。限度一杯までの低所得者向けの貸付金（無利息）をもとに、ベッドや最低限の家具を買い揃え、職探しにでる。しかし、「職歴も資格もない、50歳を過ぎた女性」という設定のもとでできる仕事は限られており、かつ、仕事自体も安定的なものではない。良さそうな仕事を見つけても、その面接までに手間と時間を十分に費やすことになる。そして、ようやく病院内の運搬係の仕事を得るが、この時点で生活保護は打ち切れ、給料の2週間後までの資金が早くも底をつく。そこで、著者は生活の向上を図る、というより最低限の生活を保つために借金をすることになり、低所得者の生活を始めて間もなく、その苦しさを実感する。

この後は、学校給食、託児所、飛び込みの電話セールス、早朝の清掃、ケーキの詰め込み作業、老人ホームの介護補助などの仕事をこなしていく。ここでの各職場における実務や職員とのやりとりが、本書の多くの部分を占める。それぞれの職種にジレンマがあるが、共通するのは効率化とコスト削減のための外部委託による仕事の非効率化、決定的な要員不足である。ここから、単なる現状の仕事のきつさだけでなく、雇用が流動化しスキルが蓄積されないことなど中長期的にみたコスト高が推測されている。

ところで、職を転々としたといっても、経済的な基準は最初に従事した病院の運搬係の給与をもらっているという前提にたっている。そういう意味では、当然ではあるが、現実にそれらの仕事に従事し、明日とも知れない失業の不安を抱える人たちの生活を正確にトレースしているというわけではない。また、本来的には著者はジャーナリストとして一定の収入が確保されているということもあろうが、食事の侘しさなど生活部分の記述には若干物足りなさを感じる。ここにもう少し実感のこもったルポが欲しかった気はするが、それでも全体として非常に読みやすくまとめられており、一気に読むことができた。

このようなイギリスの実態は、日本においても決して無視できるものではないように思う。イギリスから若干遅れて、日本でも「中流」崩壊から格差拡大へと社会が進んでいるからである。本書には「貧富の差は政策によってつくられる」という指摘があるが、小泉政権が描き出す社会はどれだけの貧富の差を生むことになるのだろうか。（T・K）